

『学校日誌』に記録された「小野さつき訓導殉職」について

— 附『特別日誌』 —

【要旨】

本稿では、大正十一（一九二二）年七月七日、刈田郡宮尋常高等小
学校の小野さつき訓導が、校外での美術の授業（写生）のために担
任する児童と共に写生場所と設定した白石川に訪れ、暑さのためか
偶然に川遊びを始めて溺れた児童のうち、一名を救助し、その後、一
名と共に溺れ殉職した事実を『学校日誌』（大正十一年度）から追跡
し考察した。

分析の視点は、以下の二点である。①小野さつき訓導殉職の出来
事の『学校日誌』への記録がどのようになされているか、出来事の前
後で学校はどのような状況だったのか。②同時期に作成された『小
野訓導殉職後特別日誌』と称された文書はどのような記録があるの
か、である。

学校内部の公的文書『学校日誌』と『小野訓導殉職後特別日誌』
の記録を確認し、紹介する。

キーワード：宮尋常高等小学校、宮城県公文書館、小野さつき訓導

殉職、学校日誌

Discussion of the Notion Duty of a Teacher Satsuki Ono in
Official Journal of Miya Primary School

Hisae Sato

佐藤久恵¹⁾

1) 佐藤 久恵 東京未来大学こども心理学部（Tokyo Future University）非常勤講師 rsa53310@nifty.com

一、はじめに

本稿は、大正十一（一九二二）年七月七日の小野さつき訓導（以下、「小野訓導」）の殉職が『学校日誌』（大正十一年度）『特別学校日誌』でどのように記録されているかを確認しようとするものである。

まず、「小野訓導の殉職」とは、彼女が、当時、宮城県刈田郡宮尋常高等小学校に勤務していて、校外学習で担任児童に写生をさせていたところ、絵を描き上げた後に、暑さのためか、偶然、勝手に白石川で水遊びを始めた児童数名のうち、二名が溺れ、そのうちの二名を救助したものの、もう一人の児童を救助しきれず共に亡くなったという出来事を指している。

筆者は、この殉職をめぐるこれまで七篇の研究ノートを発表してきた¹⁾。今回取り上げるのは『学校日誌』（大正十一年度）及び『特別学校日誌』である。『学校日誌』は、多くの学校で日々の業務の記録として執筆されていたものであり、宮尋常小学校でも当時の野紙を用いて記入されていた。『特別学校日誌』は、事件の重大さに鑑みて記録を作成するために作成されたものとみられる。

本稿の翻刻は『学校日誌』小野訓導の事件とそれに関わる校内の動きなどの情報を拾ったものである。期間は「我妻校長本朝愛知県方面ニ学事視察ノタメ出張」と記されている七月一日の前日（六月三十日）から、殉職の出来事が起こった七月七日、そして、その後、十数日間とした。

二、解題

(一)『学校日誌』の様式について

『学校日誌』は、今日でも日々の記録として書かれているが、歴史的に見ると明治初年から多くの小学校で作成されてきた。大正時代には、定型化されていることが多いようで、大正十一年年当時の宮尋常高等小学校の様式は

「資料一」「資料二」に見られるとおりである。記載項目のうち毎日記入されていたことは「日付」「曜日」「気象」「温度」「職員の出欠動向」「児童の入退学」「在籍出欠席数」「記事」「放課後の記事」「責任者」「宿直者」等である。それらのほかに、突発的な出来事が記入されている。また、それとは別に『小野訓導殉職後特別日誌』（以下『特別日誌』とする）が存在している。『学校日誌』は、初期には慣行として作成されていたとみられるが、大正期には類似的の書式が他県でも見られることから、何らかの法的基盤があったのではないかと思われる。

『学校日誌』（大正十一年度）の書式は、当該年度四月一日から同一である。記入の様子は、①校長印、日直印、宿直印が必ず押印されていること。②日付が記載され、その日の天気、気温が記載されていること（「天気と気温」については「一定の検温時間」があったかは不明）。③気温は「撰氏」ではなく「華氏」で記録されていること。④職員関係の記事は出張や欠勤等が記録されていること。⑤児童に関する記事は、主に入・退学が記され、時に死亡記述もあること。そのような場合には、児童の人数が増減が生じている。七月七日に亡くなった男児の在籍は、七月九日から在籍数減で反映されている。事象とデータは連動して記述されていることがわかる。

なお、『学校日誌』は長期間保管されていたとみられ、七月七日の部分に、「救ハレタル二児童ノ姓名」「大庭徳治（東京方面ノ今□□里）昭和十四年六月二十日記ス 志村政雄（昭和十七年死亡）」という後年の記入が見られる。

今回、『学校日誌』を分析し、他資料²⁾を参照する中で、同時期に『殉職に関する特別日誌』と称していたものがあることがわかった。正確には、「特別日誌」（資料二）と称する文書がそれに該当すると思われる。これを『学校日誌』と比して、どのように位置づけるべきなのは、筆者自身は判断できなかった。理由は、『大正十一年七月（第四号電報類）小野訓導ニ関スル文書綴』という簿冊に綴られているらしいこと、しかし、筆者は未見である

こと、また、大正十三年までの墓参の記録と一緒に記述されているためである。

(二)『学校日誌』に関する論点

ここで、『学校日誌』について検討してきた結果、記述に少なくとも二つの論点があることが分かる。一つは「殉死」「殉職」の語の使用がいつから使われ始めたかという問題である。もう一つは『学校日誌』と『特別日誌』の関係である。

・「殉死」「殉職」の語

『学校日誌』の七月七日当日の記事の記述は次のようになっている。

「二、第五時小野訓導赤淵附近ノ白石川ニ於テ殉職（溺死）（午後一時四十分頃）尋四成澤與右エ門溺死 一、午後五時四十分小野訓導及成沢兩人ノ死体ヲ職員室ニ運び哀悼式ヲ行フ 午後七時兩人ノ屍ヲ各自 宅ニ奉送セリ」すなわち、当日は、小野さつき訓導と成澤与右衛門兩名の「哀悼式」が職員室に於いて行われ、その後兩名の遺体が自宅に「奉送」されている。

その記述に、「小野訓導死亡（殉職溺死）」及び「殉職（溺死）」という表現があることは注目に値すると筆者は考えている。というのは、他の資料も見比べてみたところ、少なくとも日付の点では、『学校日誌』が最も早いからである。当日以降に作成された『特別日誌』の当日分の記述では、「殉職」の表現記載はない。しかし、『特別日誌』の標題には、「殉職」の表現が入れ込まれている。

七月八日の記述にも「殉死」「殉職」の問題が現れる。『学校日誌』によれば全生徒に小野訓導の死が伝えられる。「第一時校庭ニ於テ佐藤訓導ヨリ小野先生ノ殉職並ニ成沢与右エ門ノ溺死に就キテノ訓示」とあり、佐藤訓導によって、事故死が児童へ説明されたことがわかる。ここに「殉職」という語が使われている。そして『特別日誌』ではさらに詳しく、「七月八日分」には「佐藤訓導児童一同ニ殉職訓導小野「用紙欠損不明」先生並ニ溺死児童成

澤与右衛門ニツイテ前日ノ遭難ノ状況ヲ話セリ」とあり、「殉職訓導」という語が用いられている。

・『学校日誌』と『特別日誌』の記入の時間的前後関係

二つの日誌の記載から、いずれが先に書かれたかが論点になる。すなわち、「殉職」「殉死」という語はどこから現れてきたのか、という問題である。『特別日誌』の七月七日には「殉職」がなく、『学校日誌』に殉職があるのは、次のような関係だとは考えられないだろうか。

『特別日誌』は時間を追って書かれていた。

「二、小野訓導宅へハ堤村長、佐藤、阿部両訓導 末谷、大沼ノ両教員、婦校女教員見送りヲナシ午後十一時帰校、
一、成澤與右衛門宅へハ平間助役、日下黒沢両教員十一時帰校ス、
一、午後十一時ヨリ職員全部緊急協議会ヲ開キ夜ハ一同通夜」

以上を解釈すると、午後十一時までの様子が書かれた後、午後十一時からの緊急会議により、「殉職」と表現することが決まり、そのあと七月七日の『学校日誌』が記入された。しかし、すでにその会議の前に書かれた表現は変更しなかった。そして七月八日の記入は、深夜の会議での決定に従って、「殉職」という語が用いられた。

(三)記録による事故死の前後の学校状況の記載

『学校日誌』と『特別日誌』の両日誌から、七月七日（当日）直後からの学校の様子が読み取れる。

当日は、「職員全員」が宿直者として記録されているが、小野訓導が殉職した七月七日には「職員全部」と記録されている。七月八日以後は二名が宿直している。二名での宿直期間は、宿直者名（二名分）は手書きされており、事故前日までは印鑑が押され、一名での宿直であったがそれらの点で変化している。その後、七月二十二日（土）に宿直者は一人体制に戻っている。

なお、我妻校長は小野訓導が事故死した時とその前後の七月一日から十一日まで出張で不在であった。校長印について言えば、六月三〇日の校長印のカ所は、佐藤訓導の代印になっており、この代印は、七月十一日まで続く。

七月八日は、「授業 ナシ」と記録され、児童成沢与右衛門の「葬儀」が行われていることが記録されている。また、小野訓導の葬儀は翌九日に行われた。記録には、「午后二時自宅において「告別式」が挙行午後三時出棺、火葬」と書かれている。そして「午後八時ヨリ村葬二閲シテ委員会ヲ開ク」とある。

(四) 事故死前の学校の様子

資料から校長の出張不在と摂政宮（東宮殿下）奉迎が読み取れるのでふれることにしたい。

・校長の不在

六月三十日から七月十一日までの期間は校長が「愛知県方面に出張して」校内にいなかったことが記録されている。今回は『特別日誌』の七月七日の記録のみを翻刻し『学校日誌』の同日の内容だけ比較して確認した。

・東宮殿下の通過

事故死の前日七月六日に摂政宮殿下（東宮殿下）のお召し列車が通過という出来事があった。『学校日誌』の記録に、「放課後職員児童一同万歳河原ニ於テ東宮殿下ヲ奉迎ス（殿下御召列車三時四十分御通過）」とある。写生場所として小野訓導が設定し、その奉迎の体験の追想をさせたかった、または、この地で遠近法を教えることを意図したとの記事もあるが³、筆者にその根拠は確認できてはいない。今後、検討しなければならないが、本翻刻の範囲では確認できない。

三、考察

『学校日誌』『特別日誌』の記述の違いを考える上では、筆者の前稿⁴に言及があるので、佐藤訓導及び我妻校長の「進退伺」の文書の記述についておくと、文書としての目的の違いは明白だが、「特別日誌」に「遭難場所へ応急手当用トシテ、宮伊勢屋ヨリゴサ一枚／敷布一枚 テント一枚持来ル、同和泉屋ヨリ白敷布二枚、ゴサ二枚、ムシロ三枚、／藁二把、縄二把 麻細引一把買ヒ求ム」等とあり、後者の詳細さは、行政への進退伺書類とは明らかに異なる。

また、「我妻校長へ緊急事態を伝えるために五カ所の警察署に打電した件」については『特別日誌』にだけ記述されたものである。

概要を記したものが『学校日誌』だとすると、内部事情をも記載したものと『特別日誌』を考えることができるのではないか。しかし、学校への訪問者に『特別日誌』を見せていたという事情をも考えると、当時の情報開示状況を推測して考えることのできる点でもある。

【謝辞】

コロナ禍でもあり、遠隔でもあるため訪問が困難であるとして、宮城県蔵王町立宮小学校小野さつき訓導遺徳顕彰館保存資料について、蔵王町教育委員会社会教育指導主事佐藤洋一氏が特別の配慮で、資料をご提供くださったことに感謝いたします。文書の内容解釈及び翻刻については立正大学心理学部教授の所澤潤先生に助言を頂きました。また内容解釈については國士館大学非常勤講師の神部秀一先生からも助言を頂きました。ここに記して深く感謝申し上げます。

四、資料と翻刻

『学校日誌』の画像を、六月三十日から七月十一日まで、計八日分（二頁に二日分）を掲出した。その後、小野訓導に関する部分のみを七月二十二日分まで翻刻して示した。

○凡例

- 一、『学校日誌』を資料一、『小野訓導殉職後特別日誌』（『特別日誌』）を資料二とし、それぞれに原資料の一部を画像で揚げた。
- 二、資料の翻刻に際しては、できる限り資料の内容に忠実になるように留意し、改行は原文書の改行部分通りとし、記事の内、改行のある部分については「/」を挿入して一行に翻刻する。
- 三、漢字は原意を損なわない限り、常用漢字体のあるものは、常用漢字体に改めた。未判読文字は□で示した。
- 四、翻刻内に、「」で示したのは、筆者の加筆や説明である。
- 五、『学校日誌』には、罫線によって欄が設けられ、項目名が記載されている。

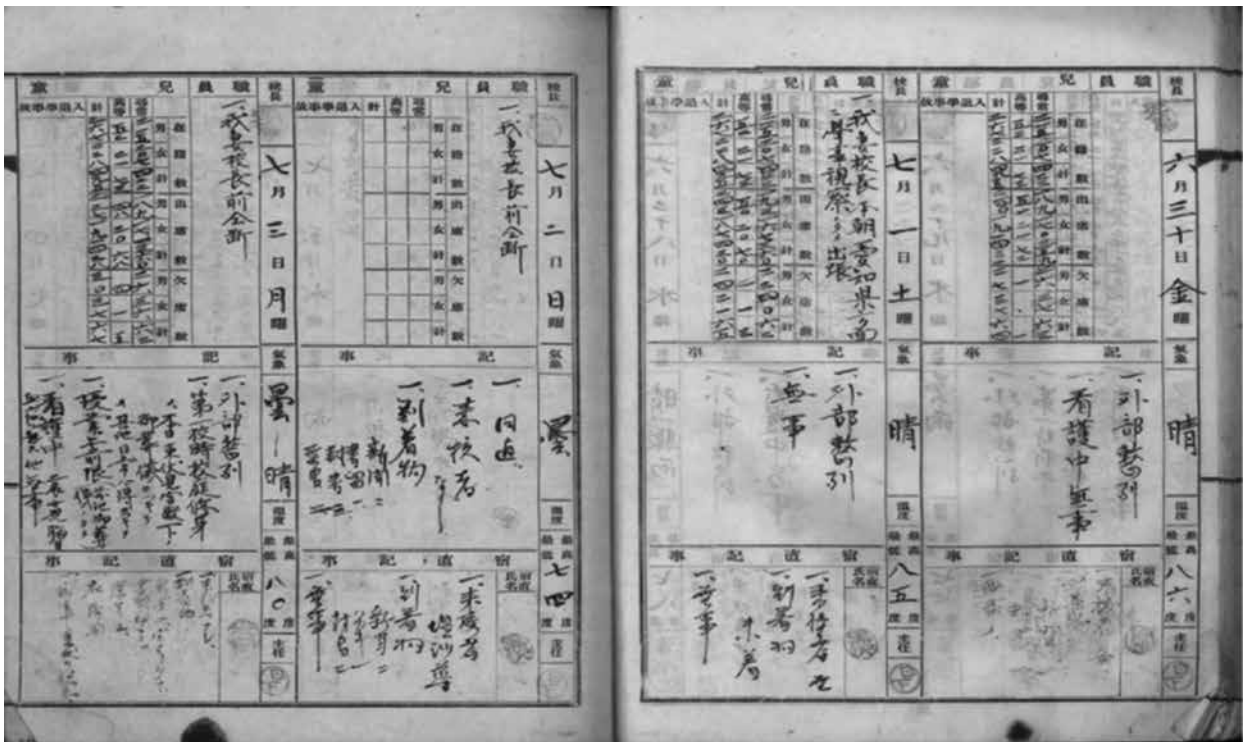
項目名は【校長印】【主任印】【宿直印】【日付曜日】【気象】【温度（華氏）】【職員】の関係記事、児童関係記事で【入退学事故】、【宿直記事】である。画像に見られるように、月日、曜日、気温、児童数などは、印刷配置された漢字と漢字の間に記入すればよいようになっている。

例えば、六月三十日のうち、月と日は活字であるが、六月三十日と翻刻した。校長、宿直の欄は、殆どが印になっているが、翻刻では【校長】（印）（佐藤）のようにした。空欄の項目は翻刻では省略した。

六、『学校日誌』の欄外に記載のあるもののうち、小野訓導殉職に関係があると思われるものは【欄外記載】と示した。

『学校日誌』に記録された「小野さつき訓導殉職」について

資料一 『学校日誌』「六月三十日から七月三日」と「七月四日から七月七日」



資料一

【学校日誌】

校長^印(佐藤) 七月一日土曜 「佐藤訓導の代印は前日からである」

日直^印(日下) 宿直^印(阿部) 【気象】晴 【温度】八六度

【職員】

一、我妻校長本朝愛知県方面ノニ学事視察ノタメ出張

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長^印(佐藤) 七月二日 日曜 主任^印(日下) 宿直^印(黒沢)

【気象】曇 【温度】七四度

【職員】

一、我妻校長前全断

【記事】

一、日直^印 小野 「記録のあるかぎり、小野訓導は6回目の日直である」

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長^印(佐藤) 七月六日 木曜 主任^印(日下) 宿直(黒沢) 「手書き」

【気象】曇 【温度】八一度

【記事】

一、外部整列

一、午前九時始業授業

四時限

第一時 校庭修身／放課後職員児童ノ一同万歳河原ニ於テ／東宮殿下ヲ

奉迎ス

(殿下御召列車三時四十分御通過)

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長^印(佐藤) 七月七日 金曜 主任^印(日下) 宿直(職員全員) 「手書き」

【気象】晴 【温度】八五度

【職員】

一、我妻校長前全断

一、小野訓導死亡(殉職溺死)

【児童】【入退学事故】尋四成沢与右エ門死亡(溺死)

【記事】

一、外部整列

一、第五時小野訓導赤淵ノ附近ノ白石川ニ於テ殉職(溺死)

(午后一時四十分頃)

尋四成沢與右エ門溺死

一、午後五時四十分小野訓導及ノ成沢兩人ノ死体ヲ職員室ニノ運ビ哀悼式ヲ行フノ午後七時兩人ノ屍ヲ各自ノ宅ニ奉送セリ

志村政雄(昭和十七年死亡)

一、救ハレタルニ児童ノ姓名 大庭徳治(東京方面ノ今□□里) 昭和十四年

六月二十日記ス

【宿直記事】

職員一同御通夜

【在籍数】【尋常】男・二二四 女・二〇七 計・四二一

校長^印(佐藤) 七月八日 土曜 主任^印(日下) 宿直(堤・日下) 「手書き」

【気象】晴 【温度】八八度

【職員】

一、第一時校庭ニ於テ佐藤ノ訓導ヨリ小野先生ノノ殉職並ビニ成沢与右エ門ノノ溺死ニ就キテノ訓示

一、授業ナシ

一、本日午後五時、成沢与右エ門ノ葬儀ニ堤、阿部、黒澤、末谷、大沼、教員並ニ本校児童代表ノ二名及宮司方面児童全部会葬

【在籍数】【尋常】男・二二四 女・二〇七 計・四二二

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長印(佐藤) 七月九日 日曜 主任印(日下) 宿直(佐藤、日下)「手書き」

【気象】晴【温度】八七度

【記事】

一、本日午後二時 故小野ノ訓導自宅ニ於テノ告別式挙行午後三時ノ出棺火葬ノ佐藤 堤 末谷 大沼教員ノ高等科女児会葬
一、午後八時ヨリ村葬ニノ関シテ委員会ヲ開ク

【在籍数】【尋常】男・二二三 女・二〇七 計・四二〇

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長印(佐藤) 七月十日 月曜 主任印(日下) 宿直(阿部、黒沢)「手書き」

【気象】晴【温度】八九度

【記事】

一、午前六時 故小野訓導ノ納骨式ニ黒沢、大沼ノ教員 〇〇 参列
一、阿部訓導 佐々木ノ吉三郎先生ヲ白石〇〇ノ出迎ス
一、午後七時ヨリ青年団ノ役員会開催

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長印(佐藤) 七月十一日 火曜 主任印(日下) 宿直(日下、阿部)「手

書き」

【気象】晴【温度】八八度

【職員】

一、我妻校長午後十一時帰校

【記事】

一、東京ヨリ我妻校長出シノ電報午前十時〇〇

校長印(我妻) 七月十二日 水曜 主任印(日下) 宿直(堤、黒澤)「手書き」

【気象】晴【温度】八八度

【記事】

一、村葬準備ノ児童随意参拜ノ午後七時第一部青年団ノ員の村葬奉仕
〇〇〇〇第一部役員会をノ開ク

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長印(我妻) 七月十三日 木曜 主任印(日下) 宿直(職員全部御通夜)「手書き」

【気象】晴【温度】八七度

【記事】

一、午後〇時佐藤訓導ノ高等科男生十二名ノ小野先生の遺骨迎へ
一、午後六時到着村〇〇ノ職員児童一同お迎へ
午後六時半児童一同へノ我妻校長 佐藤訓導ノより訓示

一、夜八時より念仏お通夜

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長印(我妻) 七月十四日 金曜 主任印(日下) 宿直(日下、阿部)「手

書き」

【気象】晴【温度】八七度

【欄外に記述あり】

菅場県視／学 本県知／事代理として／小野先生宅へ寄る

【記事】

一、午前十一時より読経

一、午后一時出棺葬儀／午后六時終す

一、小野先生の遺骨を職員／児童及び青年処女会員全部／村境まで送る但

我妻校長／堤訓導は小野家まで

帰校午後十一時

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長㊟（我妻） 七月十五日 土曜 主任㊟（日下）宿直（佐藤、黒沢）「手

書き」

【気象】晴【温度】八五度

【記事】

一、高等科児童全部／出校 校舎内外の後／整理をなす

一、尋常科全部□□／休業

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長㊟（佐藤） 七月十六日 日曜 主任㊟（日下）宿直（堤、日下）「手書

き」

【気象】晴曇【温度】八五度

【職員】

一、我妻校長郡衛ニ出張

【記事】

一、日直 末谷ふよの

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長㊟（なし） 七月十七日 月曜 主任㊟（日下）宿直（阿部、黒沢）「手

書き」

【気象】暴雨【温度】八三度

【職員】

一、我妻校長県庁ニ出張

【記事】

一、外部整列

一、第一、二時校舎内外／各級教室大掃除

第三時、佐藤訓導ヨリ／校庭修身

第四時、職員児童一同／小野先生墓参

第五時各級□室訓示

一、来校者 小野先生宅ヨリ／貞勝氏外一名御礼トシテ来校

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長㊟（我妻） 七月十八日 火曜 主任㊟（日下）宿直（佐藤、堤）「手書

き」

【気象】曇【温度】八〇度

【記事】

一、外部整列

一、佐藤武氏（大日本学術協会／幹事）

白石町齊藤□写真□□□／来校／□□書拾四冊小野先生／殉職記念□

□寄贈）

一、小野先生別家小野今朝／五郎氏ゴロタイプ商会員／八巻義一氏同道来校

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長[㊦]（我妻） 七月二十日 木曜 主任[㊦]（日下）宿直（日下、黒沢）「手書き」

【気象】晴【温度】八四度

【記事】

一、外部整列

第一校時 校庭訓示

第二校時 小野先生墓参

一、来校者

東京□画館出張員／小野喜作氏

【宿直記事】【宿直氏名】 日下 黒沢「手書き」

一、来校者／大庭常五郎キ／（小野先生霊前ニテ／読経）

「祭壇が宿直室に飾つてあつたため、そこでの読経と考えられる」⁵ 【注前

掲『小野訓導の死と其の前後』隆文館十八—十九頁】

佐藤、阿部訓導

【児童】【入退学事故】「記載なし」

校長[㊦]（我妻） 七月二十二日土曜 主任[㊦]（日下）宿直（黒沢）「手書き」

【気象】晴【温度】九二度

【職員】

一、我妻校長及佐藤堤日下阿部訓導／故小野訓導講演会ニ出席ノタメ／仙台

へ出張「講演会は仙台市宮城師範で行われた」

【記事】

一、外部整列

一、短縮授業二時限

一、来校者／大河原校女教員 七名／来校（小野訓導墓参）／森久三郎氏
【児童】【入退学事故】「記載なし」

資料一

【小野訓導殉職後特別日誌】

七月七日（金） 参考 七月四日雨 同五日雨 同六日晴 午後三時四十分東宮殿下御召

列車仙台ニ向ケ当現場通過

一、我妻校長目下愛知県方面の学事視察のため出張中、

（七月一日出発十二日マテノ予定）

一、午後一時五十分頃尋四児童ヨリ小野訓導ト児童成澤／與右衛門トハ中川原方面の白石河中ニ溺ルトノ急報ニ接シ、職員一同直チニ現場ニ赴キタル時ハ既ニ兩名共水中ニ没シ居レリ、直チニ搜索ヲナス、

一、一方、村医、役場、警察署、白石病院、／溺死者自宅ニ急ヲ報ジ且ツ警鐘ヲ乱打シテ／応援ヲ求ム、

一、多数ノ応援者ニヨリ極力搜索シタル結果、午後二時頃小野訓導ノ屍体ヲ深サ約五尺五寸位ノ処ニテ発見／児童與右衛門の屍体ハ小野訓導屍体発見後約／四十分ニシテ同所ヨリ約二十間程ノ上流（現在の標柱処ヨリ／真東方面）水深サ約八尺ヨリ発見

一、屍体発見後、山家村医、遠藤村医、坂東白石病院／長、広瀬白石町医ノ四名ヨリ応急手当ヲ午後／五時半頃迄施シタルモ、兩名共遂ニ蘇生スルニ至ラズ

一、午後五時四十分両屍体ヲ学校職員室内ニ運ビ警／官立会検死ノ上、僧侶三名ヨリノ読経並ニ参列／者一同（遺族、郡官吏、役場員、学校職員等約／三十人）の焼香ヲナシ午後七時両屍体ヲ夫々各自宅／ニ送ル

一、小野訓導宅へハ堤村長、佐藤、阿部両訓導 末谷、大沼／ノ両教員、帰

校女教員見送りヲナシ午後十一時帰校、

一、成澤與右衛門宅へハ平間助役、日下黒沢両教員十一時帰校ス、

一、午後十一時ヨリ職員全部緊急協議会ヲ開キ／夜ハ一同通夜

一、遭難場所へ応急手当用トシテ、宮伊勢屋ヨリゴサ一枚／敷布一枚 テン
ト一枚持来ル、

同和泉屋ヨリ白敷布二枚、ゴサ二枚、ムシロ三枚、／藁二把、縄二把

麻細引一把買ヒ求ム

一、同ジク内親悪土ヨリ藁四把 ムシロ二枚借用

一、午後八時出張中ノ我妻校長（急ヲ告グルタメ左ノ警察署ニ打電ス／大阪、
神戸、名古屋、広島、五カ所 「破損による不明」

【欄外】一、現場ニ於ケル尋四／児童 □□□□／引キ上ケ人員点呼

【次頁欄外】 自宅ニ照会シタル結果健在ナリ／佐藤訓導ハ

一、小野訓導見送後、白□二出／郡／ニ事件ノ報告シテ午前一時帰校、

頁

2 佐藤武『小野訓導の死と其の前後』隆文館三九一四九頁、阿子島雄二編『あ

小野訓導』株式会社三愛 八一―三頁

3 『河北新報』大正十一年七月八日、または九日付

4 前掲「公文書に表現された小野さつき訓導殉職についての一考察」二三―
二四三頁

5 前掲『小野訓導の死と其の前後』隆文館一八一―一九頁

(ついで) ひびき

【受理日 2023年11月22日】

1 以下、七編である。佐藤久恵「道徳教材としての殉職についての一考察―小

野さつき訓導遺徳顕彰館にふれながら」『東京未来大学研究紀要』第一〇号、

二〇一七年、二一―二二〇頁、同「小野さつき訓導の人命救助と殉職の捉え

についての考察―鷹野つぎの随筆と『少女の友』小野訓導追慕号にふれながら

―『東京未来大学研究紀要』第二二号、二〇一八年、一四九―一五四頁、同「雑

誌『婦人世界』にみられる小野さつき訓導殉職の反響とその意味『東京未来大

学研究紀要』第一三三号、二〇一九年、一五七―一六四頁、同「雑誌『令女界』

における小野さつき訓導殉職についての考察」『東京未来大学研究紀要』第一四

号、二〇二〇年、一九七―二〇二頁、同「公文書に表現された小野さつき訓導

殉職についての一考察」『東京未来大学研究紀要』第一五号、二〇二一年、

二三―二四三頁、同「小野さつき訓導殉難情報の伝播―緊急事態は電報でど

のように伝えられたか―『東京未来大学研究紀要』第一六号、二〇二二年、

一八五―一九七頁、同「小野さつき訓導と大正新教育―『小学校教授日録』の

記録から―『東京未来大学研究紀要』第一七号、二〇二三年、二二九―二四〇